

至誠

明治神宮武道場
至誠館 館長 荒谷 卓

宮本武蔵が著した『五輪書』に、「巖の身と云は、動く事なくして、つよく大なる心なり」と書かれている。この「巖の身」とは何を意味するのか。

武道のたしなみが無い人にも分かりやすいように、心身の「調和とバランス」という視点から考えてみたい。

私が武道で追求している大きな課題の一つに、対抗的にならずに相手に勝つ、即ち、心身が乱れずに勝負を決するということがある。

外国人にはなかなかこの本質の部分伝えないのだが、向かってくる相手に対して、相手の攻撃力以上の強烈な力がないと勝てないという発想を捨てることが重要である。

こちらが、相手の攻撃力を受け入れる『調和力』と、それでもなおかつ心身の安定を維持できる『バランス力』があれば、この『安定力』を相手に作用させることで相手を崩すことが出来る。

例えて言うならばどっしりとした大きな岩のように安定した

人物に対してぶつかっていけば、ぶつかる力が強ければ強いほど、その人は大きく跳ね返されてしまうだろう。

別の例を挙げるなら、武術的には、台風や竜巻などの中心は静かで安定しているが、その周囲には凄まじい暴風が吹いており、近づくものを渦の中に巻き込み跳ね除けてしまう。コマもその中心は静止しているように不動の安定感を保持しているが、実際には激しい回転を伴って安定しており、接触すると跳ねとばされてしまう。

柔道の神様と言われた三船久蔵・十段の技などをみていると、安定の中に相手を取り込まれていつの間にか投げられている様子が分かるであろう。まさに「巖の身」を体現していると言える。

ちなみに、日本の神々は、「しろしめす」「きこしめす」「みそなわす」御存在である。つまり、不変不動の存在でありながら、分け隔てなく、人々の気持ちを「知ってくれる」、願いを「聞いてくれる」、行動を「見守ってくれ

る」受容の神々である。日本人は、そのような御存在を、畏敬の念を持って崇めてきたのである。

攻撃でも防御でもない安定を求めめる作戦

武蔵が言う「巖の身」となると心身の安定を保持している者は、攻撃をしているわけでも防御をしているわけでもない。ただ、磐石の安定を維持しているだけだ。

これは軍事戦略を考える上でも有効な考え方だと思われる。軍事戦略の世界には、長く「攻勢作戦」と「防衛作戦」、すなわち攻撃と防御の二つの概念が存在したが、近年はこれに加えて「安定化作戦」＝「スタビリティ・オペレーション」という概念が重要視されるようになっていく。

従来の攻撃や防御といった軍事作戦の他に、新しく、社会を「安定化」させる能力が軍隊に求められるようになったのである。とりわけテロとの戦いにおいては、テロリストという敵を攻撃し

たり、敵からの攻撃に対する防衛作戦を展開するだけでなく、テロリストが生れる、もしくは活動出来るような土壌をなくすために、その国や地域の安定化をはからなければならぬ、というコンセプトである。

安定していれば、テロリストが生まれにくいし、外部からのテロリストの侵入も困難である。このような安定した状況を創出出来れば、攻勢作戦も防衛作戦も不要になる。

こうした安定化作戦の理論は、米国などの軍事戦略の中で出てきたものだが、日本の伝統的兵法の発想に通じるものがある。

米国は、イラクやアフガニスタンでの泥沼の対テロ戦争を通じて、殺しても殺しても次から次に現れる敵対勢力の現実を直視し、「敵を攻撃するだけではなく、敵が発生しない環境を創出しなければ解決しない」ことに気づき、図らずも日本の武道が古来から目指してきた道と近いコンセプトを採用するようになったと言える。

「巖の身」のような安定した国家の再建を目指せ

日本の武術では、自己の安定の中に相手を取り込むことになり、勝敗を決する際に必ずしも、相手を打ち負かす必要はない。

力で攻めてくる相手に力で対抗してしまうことは、武術的には失敗である。経験の浅いものは、恐怖の表れとして力を使って反撃しようとする。その逆は、恐怖で体を緊張させ、相手の力を最大限に受けてしまう。こうした対応をとることは、相手の戦意を増長させる作用がある。

武術の達人は、自己のバランス（安定感）の中に相手を取り込むだけで、相手が勝手にバランスを崩す。内なる安定性を強めていけば、相手の力を恐れることなく、外からの力を受け容れて自身の安定の中に取り込み、さらに自身の安定を高めるといった良い循環が出来る。

戦術的には、積極的に相手を見方に取り込むことを上策とする。

例えば、日本の将棋のルールとチェスのルールを見比べると、戦いのコンセプトの違いがよく分かる。将棋もチェスも、相手の駒をボード上から排除していくわけだが、チェスでは、排除された駒は死駒として扱われるのに対して、将棋では、相手の駒を自分の駒としてボード上で何度でも使うことができる。

こうした発想は、国際関係にもあてはめることができる。

民心が安定した国家は、たとえ外国が圧力や揺さぶりをかけてきたとしても動することなく、逆にその外からの力を内なる力に変換することができるだろう。例えば近隣諸国が歴史問題や領土問題で圧力をかけてきても、自国が真に安定していれば、外圧をその安定感の中に取り込んでしまえばいい。相手国の国民が日本の施政と社会のほうがいと思えばいいのだ。その安定した心情の国民の実態こそが、歴史問題への解答になる。

楠木正成の言葉に、「兵を学ぶ法は、心性を悟り庶民を親愛するを上とし、計謀によつて学ぶを中とし、戦術をむさぼり習うを下とする。(中略)将に徳あるときは、敵の兵必ず我兵となり、敵の民我民となる。将に智あるときは、敵の謀我謀となし、敵の利もまた我利となる。将に勇のあるときは、敵の威我威となり、敵の能我能となる。この三徳を以て、明らかに方法を明察し、敵の謀に乗じて、

却つてこれを覆す、これ名づけて上將の軍法とす。中將は、自らその徳を積まず、その功を求め、ただ敵の謀を察し、その計略を欺き、我謀を多くして、敵を殺さんことを用いて、敵の生するところを知らず、十度戦いて十度勝と言えども、未だかつてその太平を知らず、これ中將の法なり。下將は、ひとえに戦いを好んで、利を争い、士民を使うに怒りを以てし、人を従えるに専ら殺罰

を用い、己の勢いを頼んで敵の智謀を悟らず。(以下略)」とある。この場合、戦いとは何も軍事的なものだけをさしているわけではない。経済でも同じである。経済競争を優先し、法的強制力を持つて国民をそれに従わせることは、まさに下將の策といわざるを得ない。

のバランスを失い、国民は疲弊し大陸の干渉を受けていた足利時代の後期。自国の内政安定維持のために、煽動的な外圧を排除し競争を抑制することで、内部バランスが充実していた江戸の鎖国時代。などさまざまな時期が存在した。競争は精神的にも実態的にも、對抗的傾向を助長しバランスを失いやすい。国を解放し国際世界のあらゆる力を受け容れるというのならば、それ以上の安定力を保持していなくては、国家は分解する。

国家は経済だけで成り立つものではないのだから、安保健衛や福祉レベルとのバランスを適切にしなければならぬ。

今こそ、「調和とバランス」という観点から我が国の歴史を見直し、国家の中核を強くし民心の安定を図り、安定的な力を持続させ、「巖の身」のような国家をつくることを戦略の基軸に据えるべきではないか。



現在の日本に必要なのは、国家の中核を強くすることであり、中心力もないまま中国などに対抗しようとすればバランスを崩すことになる。日本の歴史を振り返ってみると、下克上という自由競争によつて調和という発想が喪失し国家